

## 5. 園・クラスの運営

一日の流れ	◎/○/△	◎/○/△
子どもの発達や必要、生活のリズムに応じて、一日の流れが考えられている。		
保育者は、子どもが一日の見通しが持てるよう配慮し、計画している。		
日案は、個々の子どもの必要に応じて柔軟なものとなっている。		
子どもたちを必要以上に待たせないように配慮している。		
保育者の役割	◎/○/△	◎/○/△
保育者は、子どもの状態や興味・関心に臨機応変に対応できるようにしている。		
複数の保育者で保育する場合には、十分に打ち合わせをし、チームとして柔軟で、効果的に動ける体制を取っている。		
集団編成	◎/○/△	◎/○/△
子ども同士や、子どもと保育者との人間関係を考慮して、集団の編成を行なっている。		
縦割りの集団を編成する場合は、それぞれの年齢に応じた活動が展開できるように工夫している。		
活動に応じて、柔軟な集団編成を行なっている。		
園全体の子ども、保育者が参加する行事・活動がある。		
園やクラスを円滑に運営するために、園で大切にしていること。		

## 6. 家庭との連携

家庭との連絡	◎/○/△	◎/○/△
送迎時に、家族と意識的に会話を交わすようにしている。		
連絡帳が、子どもの様子を知ったり、伝えたりすることに役立っている。		
一人ひとりの子どもの家族と定期的に話し合う機会が設けられている。		
家庭への働きかけ	◎/○/△	◎/○/△
「園だより」などで、園での子どもたちの様子、園の保育方針などを伝えている。		
「園だより」などで、子育てのポイントなど子育てのための情報を伝えている。		
家族の参加	◎/○/△	◎/○/△
子どもたちが家族と園で楽しむ行事・活動が設けられている。		
園で、家族が子育てを学びあったり、相談したりできる機会がある。		
家庭との連携をすすめるために、園で大切にしていること。		

Form A・Bをもとにした話し合いをした後で、各人がForm C・D1・D2を持ち帰ってそれぞれのFormの記入をします。

Form Cには、「1. 豊かな環境」「2. 子どもの主体性—自由と参加—」「3. 支援の方法—保育者の感性と関わり—」「4. クラスの雰囲気—集団内の心地よさ—」「5. 園・クラスの運営」「6. 家庭との連携」の6つについて、細かい項目が挙げられています。さらにそれぞれには、その観点について「大切にしていること」を記述する欄が設けてあります。

- まず、Form Cのそれぞれの観点について、これから取り組んでいこうと考える項目に○をつけていきます。特にしっかり取り組みたいものには◎、次に取り組みたいものには○をつけていきます。
- そして「大切にしていること」には、これまで自分のクラスや園で大切にしてい取り組んできたことを書き込みます。そこから出発して、さらに取り組みたい点が見えてくるとよいでしょう。

Form Cについては、園の現状や考え方に合わない部分があるかも知れません。ここに書かれていることを全てチェックし、完璧にこなすことが目的ではなく、自分たちが気づかなかったことに目を向けるための手がかりとして使って頂きたいと思います。また、園独自で項目を付け加えたり、必要がなければ削除していったりすることで、皆さん自身でこの部分を作り上げていくことが望ましいと私たちは考えています。

この段階を一つ踏むことによって、次のステップ=Form Dで行なう、明日への目標作りが具体的にになっていきます。ここでは、「できていない」点ではなく、「これから前向きに取り組んでいく」点を話し合っていきましょう。



(撮影協力：新宿せいが保育園、お茶の水女子大学附属幼稚園) Photo by Julia Moons & Ferre Laevers

2) Form D 1を使って、「現状で優れているところ」を確認しましょう

Form D では、「明日のより良い保育のために」具体的にできることを書き込んでいきます。そのためには、まず Form D 1 でこれまで自分たちが取り組んできて優れている点を書き出しましょう。「環境」「子どもの主体性」「支援の方法」「クラスの雰囲気」「園・クラスの運営」「家庭との連携」のうち、話し合う項目について、その内容を記述します。

改善を図る時に、大切なことは欠点を見つけて直すことではなく、自分たち（子どもたちも含めて）の良い点、これからも大事にしていきたい点を見つけることです。そこから伸ばせるところを伸ばすのが、保育の質の改善への近道です。

Form D 1

明日のより良い保育のために

現状で優れているところ

<input checked="" type="checkbox"/> 環境	<input type="checkbox"/> 子どもの主体性	<input type="checkbox"/> 支援の方法	<input type="checkbox"/> クラスの雰囲気	<input type="checkbox"/> 園・クラスの運営	<input type="checkbox"/> 家庭との連携
子どもにとって興味関心を持てるような道具が置かれており、それらを用いて環境と関わっている。					
<input type="checkbox"/> 環境	<input checked="" type="checkbox"/> 子どもの主体性	<input type="checkbox"/> 支援の方法	<input type="checkbox"/> クラスの雰囲気	<input type="checkbox"/> 園・クラスの運営	<input type="checkbox"/> 家庭との連携
遊びたいこと、もの、イメージを個々の子どもが持っている。また、積極的に環境にある物を取り入れて遊んだり、一緒に遊びたい友達と関わっていく姿がみられる。					
<input type="checkbox"/> 環境	<input type="checkbox"/> 子どもの主体性	<input type="checkbox"/> 支援の方法	<input type="checkbox"/> クラスの雰囲気	<input type="checkbox"/> 園・クラスの運営	<input type="checkbox"/> 家庭との連携

3) Form D 2を使って、具体的に保育の改善のために取り組むことを決めていきましょう

Form D 1 で優れているところを確認し、それらを今後も大切にしていけることを参加者全員で共通理解したら、次に、明日のより良い保育を実現するために「改善したいこと」「具体的に行なうこと」を書き込みます。

- ① 「できるところから始める」という姿勢が大切です。
- ② その際、おおまかでも良いですから、改善したいことを実施する期間を決めておきます。次に園内で話し合いをするまでが良いかもしれません。
- ③ 「評価」のところは、次の話し合いの際に記入します。期間内にそれが達成できたか、どの程度できるようになったかを話し合って書いていきます。
- ④ 結果として「うまくいった理由」「うまくいかなかった理由」の検討が、保育実践を変革していく大きな役割を果たします。
- ⑤ うまくいった達成感は更なる質の向上へとつながっていきます。

Form D 2

明日のより良い保育のために

7月5日から 7月12日までの改善点      さくら 組：					
<input checked="" type="checkbox"/> 環境	<input type="checkbox"/> 子どもの主体性	<input type="checkbox"/> 支援の方法	<input type="checkbox"/> クラスの雰囲気	<input type="checkbox"/> 園・クラスの運営	<input type="checkbox"/> 家庭との連携
改善したいこと 現在も様々な環境構成を心がけ、豊かな環境があるといえるが、子どもと子どもがお互いに見合える場を設けて見たい。		具体的に行なうこと 製作の机を置く位置を考え、同じ興味を持つ子どもたちが数人で見合えるような場を設ける。		評価	
<input type="checkbox"/> 環境	<input type="checkbox"/> 子どもの主体性	<input checked="" type="checkbox"/> 支援の方法	<input type="checkbox"/> クラスの雰囲気	<input type="checkbox"/> 園・クラスの運営	<input type="checkbox"/> 家庭との連携
改善したいこと 自分のイメージを伝えるのが苦手だったり、一緒に遊びたいという気持ちを表現することが難しい子どもがいる。また、クラスの中でいくつかのグループができているが、いつも同じメンバーで慣れた遊びをいつもしているの、イメージを持って発展的に遊んだり、子ども同士で刺激し合い楽しめるよう支援していきたい。		具体的に行なうこと クラスみんなで集まって、やりたい遊びを話す場を設けたり、保育者が子どもの様子をさりげなく伝えることで子どもたちが、お互いの遊びに気づいたり、関わったりしてほしい。		評価	
<input type="checkbox"/> 環境	<input type="checkbox"/> 子どもの主体性	<input type="checkbox"/> 支援の方法	<input type="checkbox"/> クラスの雰囲気	<input type="checkbox"/> 園・クラスの運営	<input type="checkbox"/> 家庭との連携
改善したいこと		具体的に行なうこと		評価	

これまでのステップを踏むことで、園や自分のクラスの現状把握ができ、明日からの保育に活かせる具体的手立てが見えてくるようになります。また、一定の期間をおいて再試行することで、更なる保育の質の向上を目指していくことができるでしょう。

ただ、日々の忙しさの中で、Form A から D までを忠実にこなし、しかも長時間の振り返り作業をすることは並大抵のことではありません。一度試してみることは大切で意味あることだと思いますが、繰り返しこの方法を使っていくためには、無理なくできるような形で行なうことが大切になってきます。過重な負担にならないように工夫してみてください。大切なのは、何よりも子どもの経験の質が少しでも良いものになるために、——誰もが居心地よくリラックスして、目を輝かせながら活動に没頭するために——保育者に何ができるだろうか、と考えることです。そして保育者自身にも、この振り返りを居心地よく感じながら、子どもたちのことを夢中になって語り合える時間を持って頂きたいと願っています。皆さんの創意工夫で使いやすいものにしてみてください。



## SICSとその方法開発にあたって

このブックレットは、ベルギー・リューベン大学経験教育研究所所長のフェール・ラーバース (Dr. Ferre Laevers) 教授が「経験に根ざした保育・教育」という思想に基づいて作成した自己評価尺度 SICS (Self-Involvement Scale for Care Setting) を基盤にしています ([http://www.kindengezin.be/Images/ZikohandleidingENG\\_tcm149-50761.pdf](http://www.kindengezin.be/Images/ZikohandleidingENG_tcm149-50761.pdf)、発行元：Kind en Gezin ならびに Research Center for Experiential Education, Leuven University)。ラーバース教授と実際にメールや対面での対話を通して、日本の文化になじむようにオリジナル版の一部分の方法を修正し作成しています。

この元ヨーロッパ乳幼児教育学会 (EECERA) 会長ラーバース教授が唱える「経験に根ざした保育」の思想は、OECD (1998) が、保育の質を向上させる代表的なカリキュラムの一つとして、スウェーデンの保育カリキュラム、イタリアのレッジョ・エミリア、ニュージーランドのテ・ファリキ、アメリカのハイ・スコープと並んで挙げているものの一つでもあります。

経験に根ざした保育とそのためのブックレットとしてのオリジナル版 SICS は、ラーバース教授が、十数年間の保育所や幼稚園での園内研修で保育者の先生方との振り返りの中から、保育者のジュリア・ムーン (Julia Moons) 先生たちとともに作成されたものです。カール・ロジャーズの来談者中心療法などの臨床心理学の理念やジョン・デューイの教育哲学等を取りこみながらも、ラーバース教授独自の思想で、子どもの実存的経験を中心にして保育プロセスの質を捉えることを通して、子どものより豊かな経験へと向かう保育の質を考えていこうとするものです。

英国ではこの安心、夢中の考え方の中でも、Involvement (夢中・没頭) に関わる尺度がクリスティーン・パスカル (Christine Pascal) 教授らによって自己評価のための方法として英語に翻訳紹介され、英国における保育改革の中核となった自己評価尺度の一つ EEL (Effective Early Learning) の鍵概念とされています。そして、2009年現在では世界25カ国を超える国の保育の自己評価のために使用され、実証的な保育改善の報告もなされています。ドイツやポルトガル、フィンランドなどでも導入されたことにより、国際比較研究等も実施されてきました。そして現在では、オーストラリア、台湾など環太平洋アジア地域でもこの思想に共感し、学ぼうとする動きが広がっています。

私たちはこの思想に学びながらも、海外の国の文化に埋め込まれて作成された尺度を日本語に直訳してそのまま使用するのではなく、日本の保育文化の実態を踏まえ、日本の保育において園内研修等で伝統的に行なってきた保育実践研究の方法の良さに関連づけながら、このブックレットとDVDを作成することを試みました。そしてラーバース教授もまた、保育が社会や文化に埋め込まれたものである以上、その各文化の独自性を尊重するべきであり、どの文化においてもすべての子どもたちがより深く対象とかかわり、その子らしく生きられる時間を保障していく理念が保たれるのであれば、文化に応じて SICS を加筆修正するのは当然のことであるという考えを話してくださいました。後日、日本の保育場面を用いたDVDや各 Form の変更点を説明したところ、このような形での使用を私たちに認めてくださいました。実際に2009年2月に来日され、東京大学教育学部において一般の方々への公開ワークショップを行ない、また保育研究に携わる専門家との2日間にわたる研究討議の機会ももって

くださいました。それによってラーバース教授が各 Form を設定した意味を汲み取りつつ私たちの方で変更をしました。

実際の変更点は、すでに実践編でも述べられていますが、以下の点があります。第1に、オリジナルSICSでは、クラスの子どもたち全員をまず短時間でも、「安心度」と「夢中度」から捉えてスキヤニングし、さらにそこから対象児を絞り記録をとって考えていくことが求められています。しかしそれでは実際に保育者が行う負担も大きくなることから、本ブックレットでは特定の子どもだけには偏らないようにすべての子どもに配慮しながらも、ある子どものエピソードに目を留めて、ビデオや映像、筆記記録によってその時のエピソードを記し、それをもとにして考えていくというスタイルにしました。日本の保育では、すでに多くの園では園内研修で、子どもの出来事を捉え、事例として語り合う文化ができていると考えられるからです。また第2に、細かなチェックリスト表現は日本の保育実態に合うようにするとともに、項目のチェック自体が大事なのではなく、さまざまな観点から自分たちの保育の良さや強みを見出していけることこそが大事と考えて、問題点を探すのではなく、より強みをみつけていくように変更を加えています。これはベルギーの言葉から、英語に訳された文章をさらに日本語に直すのではなく、ベルギーでの意図を聴き取り、良い点を見出していく方向で問題ないということを作成者に確認しました。第3に、反省して問題点を解消するという発想ではなく、保育内容や保育者の良さ、子どもの良さを見出すことで実践をより良くしていくという表現にしました。反省の文化が中心になっている日本では、いたらなかった点を他者から見つけられ、つらい思いをし、反省の弁を述べながらも後味悪い経験に終わり、結局は自らの保育の改善にはつながらないという場合があると考えられるからです。そこで、各保育者が自分の良さや強みを相互に見出し元気を出して保育していくことを願って、本ブックレットでは表現を変更しています。第4に、保育の研修時間は多忙な中で限られています。その限られた時間の制約の中でもこの理念と哲学を実現するためにはと考え、二回に分けて実施することで、一回での負担を減らしました。と同時にそれによって、その観察されたエピソードやその観察された保育を行った保育者だけではなく、話し合いに関わるすべての人が自分の保育とつなげて考え、我がこととして引き受けるという理念にむかうことにしました。また第5には、日本では家庭との連携が重要であるとの点からForm Cに新たに連携の項目を加えました。

この方法には、確定版のマニュアルというパッケージの思想はありません。このブックレットを基に、各園がさらに各園独自の歴史や伝統に裏付けられた保育の実践知で「私たちの園の振り返り項目や記録方法」へと工夫を加えていただくことを願っています。これは、保育プロセスの質の改善には、確固とした保育哲学に基づき、専門家による自律的判断を最大限に生かした、園の内側からの自己評価こそが本来の自己評価としてなされるべき、という私たちの思いによるものです。ですから、この哲学をふまえ、専門家である保育者の方が主体的に多様性を生み出し、それぞれの園でそれぞれの保育者が「私たちの園のやり方」としてこの方法をとりこみながら、そこからまた各園の専門知の対話と交流が生まれ、より良い保育の変革が具体的にこなわれていくことを望んでいます。

この経験に根ざした保育の思想で作られたSICSオリジナル版では、乳児版と幼児版が作られています。しかし今では同じ保育・教育哲学によって、18歳までの子どものために、小学校や中学校版としてPALE (Process-oriented Analysis of Learning Environment) と呼ばれる尺度も作成され、小学校や中学校における授業中の子どもの姿を観察によって理解し、それに基づいた教育実践の質を改善するための尺度として使用されてきています (Laevers, 2007)。PALEにおいても、「安心度」と「夢中度」という子どもの視点が中核にあります。つまり子どもの経験に根ざした専門家による振り返りに

よって、保・幼・小・中学校の保育・教育の質保障の連携へと向かおうとするものであるともいえます。子どもの経験に基づく保育プロセスの質の振り返りと改善は、保育・教育の専門家だからこそ捉えられる評価のための一つの窓であり、それによって質の変革への連帯を地域に生み出していくものであるといえるでしょう。外部からの科学的客観性による量的評価尺度ではなく、保育の内側から検証する人間科学による、専門家の主観性を生かした質的評価、対話によって生まれる多様な声を生かす民主的保育文化を保障する一つの道具です。子どもの安心・没頭を捉える保育者の安心と没頭、それを同僚と語り合える安心と没頭、そのような園を支える保護者の安心と没頭の輪を創りだし信頼の絆を創出していくことを願っています。

本ブックレットを作成するに当たりましては、撮影に協力して下さった園、実際にこの方法を学び、園内研修に取り入れてパイロット研究にとりこんで下さった園、研究会等で私たちの説明を聞き、さらにこの方法を日本の文化に合うように改善していくための手立てに関していろいろな前向きなアドバイスをくださった皆様のおかげで、このブックレット自体も当初の研究報告書で紹介した直訳の尺度から、数々の変更を加えながら進化を遂げています。この場を借りて、私たちに真摯に貴重なコメントをくださった多くの園や保育者、保育研究者の方々に心より感謝を申し上げますと共に、これからも日本の文化になじむよう、更なる対話が広がり、我々プロジェクトの尺度としてではなく、参加された方々にとって「私たちの方法」へと発展していくことを期待しています。

そして、もしよろしければ、「こんなやり方でやってみましたよ」「こんな風に保育が変わりましたよ」とお知らせください。そうした実践を皆さんと共有することによって、日本の保育を各々の園で改善することができれば、これ以上の喜びはありません。

### \*情報入手のために

より一層詳しい内容をお知りになりたい方には、以下のURLや本によって、ラーバース教授の思想やSICSの展開について知ることができます。オリジナルSICSや関連したDVD等も以下のサイトで購入や入手が可能です。

#### 主な著書として

- Laevers, F. (Ed.) (1994). The Leuven Involvement Scale for Young Children. Video-training tape and manual. Leuven, Centre for Experiential Education.
- Laevers, F., Vandenbussche, E., Kog, M. & Depondt, L. (1997) A process-oriented child monitoring system for young children. Leuven: Belgium CEGO.
- Laevers, F., (1998) Understanding the world of objects and of people: Intuition as the core element of deep Level learning, International Journal of Educational Research, 29, 69-86.
- Laevers, F., Bogaerts, M. & Moons, J. (1996) Experiential education at work: A setting with 5 years old. Manual. Leuven: Belgium CEGO.
- Laevers, F., & Heylen, L. (Eds.) (2003) Involvement of children and teacher style: Insights from an international study on experiential education. Leuven: Leuven University Press.
- Laevers, F., Debruyckere, G., Silkens, K. & Snoeck, G. (2005). Observation of well-being and involvement in babies and toddlers. A video-training pack with manual. Leuven: Research Centre for Experiential Education.
- オリジナルSICS [http://www.kindengezin.be/Images/ZikohandleidingENG\\_tcm149-50761.pdf](http://www.kindengezin.be/Images/ZikohandleidingENG_tcm149-50761.pdf)  
[http://www.kindengezin.be/Images/ZikochecklistENG\\_tcm149-50818.pdf](http://www.kindengezin.be/Images/ZikochecklistENG_tcm149-50818.pdf)

#### SICS関連のDVD等販売

[http://www.cego.be/CEGO\\_C01/default.asp?CustID=550&ComID=7&bottest=&modid=83&itemid=0&time=151644](http://www.cego.be/CEGO_C01/default.asp?CustID=550&ComID=7&bottest=&modid=83&itemid=0&time=151644)

Laevers先生の論文等 <http://www.kuleuven.be/cv/u0018384e.htm>

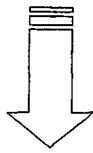
## 資料

### Form A からForm D への展開

それぞれのFormの意義と展開の流れを総括すると、以下のようになります。

#### Form A

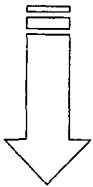
- 個々の子どもの観察をもとに、エピソードとして記録します。
- 記録を書くことで、見逃した事柄に気付いたり、振り返ることにつながります。また、エピソードを通して子どもの経験や保育の過程を考える際に、「安心度」や「夢中度」を考慮するきっかけとなります。



個々の子どもの経験を基にした観点から、  
クラス・園全体の現状を分析する観点への展開

#### Form B

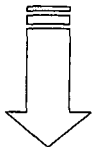
- Form A でなぜ自分が「安心度」と「夢中度」の評定をこのようにつけたのか、根拠と理由を意識化し、保育場面の現状を5つの観点から分析します。



Form A や B を用いた研修後、Form C・D を用いて次の研修を行なう  
(約1週間後ぐらいをめぐりに)  
クラス・園全体の保育の現状について、より具体的にとらえる観点への展開

#### Form C

- Form B でクラス・園全体の保育を整理した上で Form C の項目を利用し5つの観点到に沿ってさらに具体的に検討します。



現状の分析から、園全体として今後の取り組みを皆で考える観点への展開

#### Form D

- 現状の保育で優れており続けていきたいところ、そして保育で改善したいところや具体的に保育を行なっていく行動計画を考えます。



明日のより良い保育実践へ



# 第1段階

Form A

## 活動中の子どもの姿

活動中の子どもの姿		活動中の子どもの姿	
子どもの名前: _____ 月 日	安心度 <input type="radio"/>	夢中度 <input type="radio"/>	子どもの名前: _____ 月 日
記録者: _____			記録者: _____
エピソード			エピソード

## 第2段階

Form B

## 観察の分析

月 日

「安心度」と「夢中度」が高かったのはどのような要因と関係していますか	「安心度」と「夢中度」が低かったのはどのような要因と関係していますか
	豊かな環境
	集団の雰囲気
	主体性の発揮
	保育活動の運営
	大人の関わり方
子どもとその背景	特別な事情

### 第3段階の1

#### 1.豊かな環境

Form C

基本環境		◎/○/△	◎/○/△
子どもたちが遊びと遊ぶ場所を選べるように、保育室にいくつかの遊びの場が設けられている。			
保育室の環境は、子どもたちの興味と必要に応じて柔軟に遊びの場が作れるようになっている。			
保育室の環境の構成は、子どもたちの遊びを促し、高めるようになっている。			
隣り合う遊びの場はお互いにじゃまをすることなく、子どもたちが集中して遊べるようになっている。			
保育室や廊下などの園舎内の空間は、子どものために有効に活用されている。			
保育室の環境の構成は、子どもたちの目線やサイズに適したものである。			
保育室は、どこに何があるかわかりやすくなっていて、子どもたちが簡単に出し入れできるようになっている。遊びに使う道具や材料が、子どもたちの興味関心を引くように置かれている。			
子どもたちが戸外で遊んだり、散歩にいく機会が設けられている。			
保育のための道具、道具、材料と活動		◎/○/△	◎/○/△
それぞれの遊び場には子ども的人数や発達に合った道具や材料が用意されている。			
子どもの遊びを豊かにするような道具や材料が多様に用意されている。			
道具や材料、備品などがきれいで使いやすい状態になっている。			
毎日、子どもが自分で選んで行なう活動と、保育者が計画した活動が行なわれている。			
保育環境には五領域の発達を考慮した道具や材料がある。			
道具や材料、活動(遊び)は、一人ひとりの子どもの必要や、興味、発達に応じたものである。			
子どもたち一人ひとりが意欲的に遊びたいくなるような援助が行なわれている。			
保育活動に保育者の意図が反映されている。			
保育者が計画する活動は、子どもが示す興味・関心に応じて、内容や設定が構成・再構成されている。			
豊かな環境作りのために園で大切にしていること。			

## 第3段階の1

Form C

## 2. 子どもの主体性 - 自由と参加 -

	◎ / ○ / △	◎ / ○ / △
<p style="text-align: center;">選択の自由</p>		
<p>子どもが好きなものを選ぶことができるよう様々な遊具を準備している。</p>		
<p>子どもたちが、遊具や材料、活動(遊び)を自分で選び、主体的に取り組めるようになっている。</p>		
<p>子どもたちは遊ぶ場を選ぶことができる。</p>		
<p style="text-align: center;">約束事</p>	◎ / ○ / △	◎ / ○ / △
<p>きまりと約束事は、子どもたちが理解できるように説明され、時には子どもたちと一緒に決めることもある。</p>		
<p>きまりと約束事が子どもたちによく理解されるように工夫されている。</p>		
<p style="text-align: center;">参加</p>	◎ / ○ / △	◎ / ○ / △
<p>子どもたちが責任感を持って活動に取り組んでいる。</p>		
<p>子どもたちは、様々なことを決める際、自分たちで考えて、主体的に参加している。</p>		
<p>子どもたちに、より多くの自由を与えるために園で大切にしていること。</p>		

# 第3段階の1

## 3. 支援の方法 — 保育者の感性と関わり —

Form C

	励ます関わり	◎ / ○ / △
保育者は、子どもたちの遊びが豊かに展開するように関わっている。	◎ / ○ / △	◎ / ○ / △
表情、視線、声の調子などに表れる保育者の思いが、子どもたちの活動への興味や意欲を高めている。		
子どもが活動を振り返ったり、発見したり、話し合ったりするように、保育者は質問したり、関わったりしている。		
保育者は、活動になかなか取り組めない子どもたちに配慮し、関わっている。		
	感性	◎ / ○ / △
保育者は、子どもたちに対し個別の配慮をしている。		
保育者は、子どもが自ら取り組んだことに対して、関心を示したり、質問をしたり、ほめたり、認めたりするなど、肯定的な反応を子どもに返している。		
保育者は子どもに対し、温かく、愛情を持って接している。		
保育者は、子どもの思いや経験を言葉に置き換えて表現している。		
保育者は、子どもたちが感じたこと、したこと、考えたこと、期待していることなどに共感し、様々な方法でそれらを表現できるように関わっている。		
保育者は、戸惑っている子どもを気にかけて、理解しようとし、援助している。		
	自律	◎ / ○ / △
保育者は興味ある活動を選んだ子どもの選択を尊重している。		
保育者は、子どもたちが活動の中で様々なことを試し、自分の思ったようにやってみることを認めている。		
保育者は、子どもたちが自分でできることは自分でできるよう十分に配慮し、見守るときもある。		
保育者として、感性や関わりの質を高めるために、園で大切にしていること。		

## 第3段階の1

## 4. クラスの雰囲気 - 集団内の心地よさ -

雰囲気と人間関係	◎ / ○ / △	◎ / ○ / △
子どもたちは仲がよく、楽しい雰囲気が感じられ、友達を仲間はずれにしない。		
保育者が子どものことをよく知っており、子どもたちと一緒に様々な活動をしている。		
子どもたちは保育者と良い人間関係にあり、頼りにしたり、ふれあいを求めたりし、依存しすぎることはない。		
保育者が雰囲気作りと子ども同士の関わりのために気をつけておくこと	◎ / ○ / △	◎ / ○ / △
保育室には、季節や自然が感じられ、落ち着いた色や、柔らかな素材のものが用いられている。		
時には音楽を流し、それに合わせて歌ったり踊ったりする。また、落ち着いてくつろいだ雰囲気を作っている。		
保育室には、子どもの作品や、活動で取り組んだものが、子どもに達成感を持たせたり活動の振り返りができるように飾られている。		
保育室には、子どもたちの家庭や地域の文化を反映したものがある。		
保育者は活動を計画する上で、子どもたちが楽しめるような集団的活動を行なうようにしている。		
活動の中でけんかやトラブルが生じた時、友達の良いところを認め合ったり、それを乗り越えたりするような援助が行なわれている。		
子どもたちがお互い助け合ったり、友達の良いところを認め合ったりするような活動が行なわれている。		
良い集団の雰囲気作りと子ども同士の関わりを豊かにするために、園で大切にしていること。		

# 第3段階の1

## 5. 園・クラスの運営

	◎ / ○ / △	◎ / ○ / △
子どもの発達や必要、生活のリズムに応じて、一日の流れが考えられている。		
保育者は、子どもが一日の見通しが持てるよう配慮し、計画している。		
日案は、個々の子どもの必要に応じて柔軟なものとなっている。		
子どもたちを必要以上に待たせないように配慮している。		
保育者の役割	◎ / ○ / △	◎ / ○ / △
保育者は、子どもの状態や興味・関心に臨機応変に対応できるようにしている。		
複数の保育者で保育する場合には、十分に打ち合わせをし、チームとして柔軟で、効果的に動ける体制を取っている。		
集団編成	◎ / ○ / △	◎ / ○ / △
子ども同士や、子どもと保育者との人間関係を考慮して、集団の編成を行なっている。		
縦割りの集団を編成する場合は、それぞれの年齢に応じた活動が展開できるように工夫している。		
活動に応じて、柔軟な集団編成を行なっている。		
園全体の子ども、保育者が参加する行事・活動がある。		
園やクラスを円滑に運営するために、園で大切にしていること。		

## 第3段階の1

Form C

## 6. 家庭との連携

家庭との連絡	◎ / ○ / △	◎ / ○ / △
送迎時に、家族と意識的に会話を交わすようにしている。		
連絡帳が、子どもの様子を知ったり、伝えたりすることに役立っている。		
一人ひとりの子どもの家族と定期的に話し合う機会が設けられている。		
家庭への働きかけ	◎ / ○ / △	◎ / ○ / △
「園だより」などで、園での子どもたちの様子、園の保育方針などを伝えている。		
「園だより」などで、子育てのポイントなど子育てのための情報を伝えている。		
家族の参加	◎ / ○ / △	◎ / ○ / △
子どもたちが家族と園で楽しむ行事・活動が設けられている。		
園で、家族が子育てを学びあったり、相談したりできる機会がある。		
家庭との連携をすすめるために、園で大切にしていること。		



## 第3段階の2

Form D1

明日のより良い保育のために

現状で優れているところ

<input type="checkbox"/> 環境	<input type="checkbox"/> 子どもの主体性	<input type="checkbox"/> 支援の方法	<input type="checkbox"/> クラスの雰囲気	<input type="checkbox"/> 園・クラスの運営	<input type="checkbox"/> 家庭との連携
<input type="checkbox"/> 環境	<input type="checkbox"/> 子どもの主体性	<input type="checkbox"/> 支援の方法	<input type="checkbox"/> クラスの雰囲気	<input type="checkbox"/> 園・クラスの運営	<input type="checkbox"/> 家庭との連携
<input type="checkbox"/> 環境	<input type="checkbox"/> 子どもの主体性	<input type="checkbox"/> 支援の方法	<input type="checkbox"/> クラスの雰囲気	<input type="checkbox"/> 園・クラスの運営	<input type="checkbox"/> 家庭との連携

## 第3段階の2

Form D2

## 明日のより良い保育のために

月	日から	月	日までの改善	組:	
<input type="checkbox"/> 環境	<input type="checkbox"/> 子どもの主体性	<input type="checkbox"/> 支援の方法	<input type="checkbox"/> クラスの雰囲気	<input type="checkbox"/> 園・クラスの運営	<input type="checkbox"/> 家庭との連携
改善したいこと		具体的に 行なうこと		評価	
<input type="checkbox"/> 環境	<input type="checkbox"/> 子どもの主体性	<input type="checkbox"/> 支援の方法	<input type="checkbox"/> クラスの雰囲気	<input type="checkbox"/> 園・クラスの運営	<input type="checkbox"/> 家庭との連携
改善したいこと		具体的に 行なうこと		評価	
<input type="checkbox"/> 環境	<input type="checkbox"/> 子どもの主体性	<input type="checkbox"/> 支援の方法	<input type="checkbox"/> クラスの雰囲気	<input type="checkbox"/> 園・クラスの運営	<input type="checkbox"/> 家庭との連携
改善したいこと		具体的に 行なうこと		評価	

.....

## おわりに

.....

私たちにとってラーバース先生 (Dr.Ferre Laevers) との出会いは幸運であると同時に感動的な出来事でした。なぜなら、日本においては一人ひとりの良さと可能性を求め、子どもたちの遊びを中心とした伝統的な保育方法は誇りであり、最も大切な保育理念です。この保育理念というか保育方法の考えを壊すことなく、より良く生かしながら保育の質を高めていくにはどのように考えていけばよいであろうか、という研究に取り組んでいるなかでラーバース先生に出会ったからです。ラーバース先生の開発された保育の質に関わる評価方法は、保育プロセスの質尺度の開発として、これまでの保育評価の手法と異なり、子どもの側からの視点で検討する尺度であり、保育者の質的向上や環境の改善にも具体的に向けられたもので、日本が伝統的に行なってきた実践過程の評価の在り方 (園内研究) に類似するというか、同じ地平を感じさせるものでした。また、多くの異なった文化や保育制度を持つ国々でも採用され、その有効性が報告されていることは、私たちにとって大きな励みになりました。

ご承知の通り、日本における保育理念は机上の論理から生まれたものではなく、日々子どもたちの遊ぶ姿の中に何が育っているのか、育とうとしているのかを保育の過程を通して読み取り実践を繰り返し積み重ねたところから生み出されてきたものです。日本の多くの園では、この保育における実践過程の質を保つために諸外国では見られない独自の方法として園内研究会が日常的に行なわれています。そこでは保育の質をより良く高めていくということで必然的に保育にかかわる様々な評価が行なわれていますが、通常、子どもに対する評価と保育実践に対する評価を組み合わせた形で反省、省察と評価を一体化させた話し合いを中心に行なわれています。しかし、「評価」、「評定」というと、チェックリストを想起した機械的な処理のイメージがあるのか、日本の保育の実践の場ではあまり好まれている言葉ではないようです。したがって、園内研究会では、基本的な子どもへの視点や「評価」、「評定」は一人ひとりの保育者の心の中にあることを前提にしていることが多く、そのことで時に話し合いの焦点が定まらなかつたり、リーダーの一方的な話し合いになったり、単なる話し合いのみに終わってしまうこともあるようで、悩んでいる園も多くあると聞いています。

こうした悩みと葛藤に一つの道を開いてくれたのが、ラーバース先生の提唱されている保育プロセスの質尺度の評価法だったのです。ラーバース先生の保育哲学は、実践から学び、その学びを実践に還す、さらに常に実践者と同じ目線で一緒に考え合うことを最も大切にされていることです。この保育哲学は、日本の伝統的な保育理念・方法に合致して違和感なく受け入れることができました。子どもたちの姿を「安心度」と「夢中度」から一人ひとりの保育者が保育プロセスの質としていったん評定し合い、その評定した子どもの姿からカンファレンスを始めるという考えに一度ふれてみてください。「評価」、「評定」という意味が従来考えていたことと全く違うことを体感できると思います。ラーバース先生が日本滞在中、幼稚園や保育園を見学される際にご一緒させていただく機会があり、先生の人柄というか保育哲学の一端に触れさせていただく機会に恵まれました。先生の子どもへの視線と姿勢は、柔らかく、優しく、そして鋭く、初めて出会った子どもたちの写真が一コマ一コマに一人ひとりの物語が語られているように映し出されて見え、感動しました (本誌掲載の写真はラーバース先生とジュ

リア・ムーン先生が撮影されたものです)。

最後に、このブックレットは、ラーバース先生からカンファレンスを通して直接ご教授していただいた内容を中心に仲間と何回も検討し、子どもを中心とした日本の伝統的な保育プロセスを壊さない園内研究会の方法の一つを提案したつもりです。その方法は、ラーバース先生の保育哲学は受け継いでいますが、評価の仕方や内容を含め、活用方法は似て非なるものも取り入れ再構成されていると考えて良いと思います。ゆえに、完成、完結したものではなく、私たちの一番の願いは、このブックレットを通してみなさんの園に合った独自の園内研究が豊かになったり、新たに作り出すことにお役に立てれば幸いだと考えています。園内研究会の方法は、100の園があれば100通りの方法があってもよいのではと考えているからです。このブックレットを実際に体感されて様々なご意見、ご指導が得られることを期待しています。

プロジェクト代表者 小田 豊

#### <補足情報 本ブックレット添付DVDの評定に関して>

DVDに記してあります各場面については、評定に正解はありません。場面のどこをみたからどのように感じたのかと言う話し合いこそ重要です。そしてこのDVDはご自分の園で行なうためのイメージをもっていたくためのものであり、各園がご自分の実践において行なわれることが最も大切です。しかし、評定スケールとしての信頼性を保障することも、紹介し市販するにあたっては重要と考え、本DVDは、プロジェクトメンバー間での評定の一致率が高く、またメンバー以外の協力者においても保育経験者の評定が±1のなかに入る割合が高い場面を選択しました。

さらに、SICSという名前で紹介される以上、同じ視点の保障が必要と言うラーバース教授の提案により、オリジナル版作成者であるラーバース教授ならびにベルギーでのリューベン大学経験教育研究所のスタッフにもご協力いただき、日本版の本DVDについてベルギーのメンバーにも評定をいただき、日本のプロジェクトメンバーと評定の相違についての意見交流もいたしました。その結果、21場面のうち、17場面（11場面では完全に一致、6場面では0.5のみの相違）では、独立評定にもかかわらず、評定が一致いたしました（残りは1ポイントの相違が3場面、それ以上が1場面です）。本方法を使用して、保育の中で子どもの夢中度を捉える感覚には、国や文化を越えての一定の信頼性があることも明らかとなりました。また評定の相違は、保育において使用する物や活動のあり方という保育文化の相違によると考えられること、子どもが他者の活動を見ているという行為に対する評定の相違でありました。この点も、オリジナルSICSと日本版の相違ならびに信頼性に関する点として補足情報として提供させていただきますとともに、この評定と対話に参加して下さったベルギーでのスタッフの方々にも心より感謝申し上げます。